総務文教委員会会議録

１．開催年月日

平成３０年１月２９日　　開会　１０時００分　　閉会　１１時５０分

２．開催場所

委員会室

３．出席委員名

西　村　慎次郎　　宮　地　俊　則　　妹　尾　文　彦　　山　下　憲　雄

西　田　久　志　　三　輪　順　治　　佐　藤　　豊

４．欠席委員名

な　　し

５．その他の会議出席者

（１）副議長　　惣　台　己　吉

（２）事務局職員

事務局長　川 田 純 士　　事務局次長　岡 田 光 雄　　主査　柳 本 兼 志

６．傍聴者

な　　し

７．発言の概要

委員長（西村慎次郎君）　　皆さんおはようございます。

佐藤委員が少し遅れられるということですけども、ただいまから総務文教委員会を開会いたします。

〈議長あいさつ〉

委員長（西村慎次郎君）　　本日の議題は、１、所管事務調査について、２、その他でございます。

〈所管事務調査について〉

委員長（西村慎次郎君）　　前回の委員会におきまして執行部に事前にお願いしておりました質問事項について、資料を提出いただくとともに説明を受け、質疑応答を行ったところです。

本日は、前回の委員会でいただいた資料や説明に基づき、現状把握を行いたいと思います。

まず、調査事項の整理のため、執行部から提出いただきました資料や説明に基づき、私のほうでその内容を取りまとめた資料を作成しましたので、まずその資料の説明をさせていただきます。

今日配付させていただいております資料ということで、前回の総務文教委員会で執行部から説明をいただいた内容を録音テープを聞きながら文字起こしをしております。それとあわせて、説明とあわせて、各委員のほうから質問がその場で出された内容について、質問とその答弁ということで、ちょっと字が間違ってるとこありますが、質疑応答の内容もあわせて資料を付けております。それが所管事務調査の資料の次のページから執行部からの説明内容ということで、１から１１までの説明をいただいてますんで、それぞれ１ページもしくは２ページずつ番号を付けてご説明いただいた内容と質疑応答の内容をまとめておりますので、今後の現状把握もしくは検討に活かして欲しいと思っております。

ちょっと３ページの質疑応答の質問と答弁ていう字が質問、質問になってるんで、３ページの下側にある質問、最初の児童数の推移のところなんですけれどもというところの下の、また質問になってる、そこは答弁です。「就学指導というものを行っておりますので、人数はわかりますが、この場でその人数を申し上げられませんので、申しわけございません。」というのは執行部からの答弁です。質問になってますけど、直しておきます。

それから、Ａ３でまとめてる資料が別紙１－１、１－２、それから１－３もあったと思います。それから２－１ということで、まず別紙１関係ですけど、１－１につきましては、いただいた各年度ごとの児童数、生徒数の数字を一つの表にまとめたというものです。縦に各園とか小学校とか中学校の名前、それから横に向かって年度ごとの学年別の人数推移というものを表に１枚にまとめております。

この数字を基に、次の別紙１から１－２に、今度はそれをよりわかりやすくするためにグラフに表しております。グラフで見ていっていただいて、どれぐらいの人数が減ってきてるんだということを目で見える形の推移表ということで作成しております。

右側の丸い四角で囲んでるところを私のほうで今の状況を書いております。例えば、幼稚園の園児数の推移でいくと、２０１３年度には市内幼稚園に通う園児が３７４名いたが、２

０１７年度に２９９名ということで、２０１３年度の約８０％まで減少してきてると。この間、３歳児保育や預かり保育をする園を増やす取り組みを行ってきているが、保護者の共働きや少子化の影響で幼稚園に通う子供が減少してきているのが現状であるということで、現在の状況について少しずつ文章で書いてるとこもあります。園児については、５年前は３７４名が２９９名、これは保育園児もいるんで、この中には幼稚園しか含まれてませんので、公立の幼稚園しか含まれてませんので、実質の子供の数ということでは見えませんけども、その下の小学校の児童数につきましては、実際にこれぐらい、２０１３年では２，１０８名から２，０１７年度では１，８５２名まで減ってきてるというようなことがわかる資料にしております。

１－２の２枚目です。別紙１－２の２枚目は、先５年間を含めた推計ということで、園児はちょっと予想がつかないんで、それはもう省いてますけども、小学校の児童数のまず将来推計ということで、２，０１７年度までは今の実績で、２０１８年度以降は人口、平成２９年３月末現在の住民基本台帳の町別の人口から算出しておりますので、実際に市外の小学校とか私立とかの小学校へ井原市から通われてる方も含めて、通われるだろう人も含まれてますんで、ちょっと２０１７から２０１８は、それでも多少減ってますけども、実際に生まれてきて今井原市にいらっしゃる対象年齢でカウントしております。そうすると、５年先は１，５６７名まで減っていくという予想が立てられます。

上のグラフは学年別で、下のグラフは小学校別ということで見ていくと、こんな感じになるということで、１００人を割ってしまう小学校が８校ぐらい、もう本当に半分以上、７校か、７校、だから半分、５０％以上は１００名を割ってしまう児童数になるであろうと、５年後です。野上小学校については、来年度から全学区になってますんで、今はその地区の野上町にお住まいの子供の数ということで推計を出してますんで、これはまた変動はするとは思うんですが、全学区にしなければ５年後は２人というような予想も今出ておるという状況です。

もう一枚の３分の３ページは中学校です。中学校については、今の小学校に通う児童数を将来推計に使っております。稲倉小学校だけが半分というか、匠池より西側の児童と岩倉町とか下稲木町とかというところは木之子中学校に行くんで、ちょっとそこら辺は今の住民基本台帳の数字を使いながら、数人ですけど、数人が高屋中学校へ通うという試算で計算したらこんな感じです。上の段は学年別の推移なんで、今年度１，０２２名が５年後にはまた１００人減って９２８名ぐらいに減ってくるということです。

中学校別というのが下段ですけども、中学校別に見ていくと、木之子中学校とか井原中学校もですけど、そんなに減ってこないんだけど、井原中学校も減るかな。木之子中学校はほぼ横ばいをしそうな推移ではあるんですが、他の中学校は減っていくということが見られま

す。これが今の園児・児童・生徒数の推移とあわせて、この先５年間の見込みということを表に、グラフに表しております。

それから、別紙１－３はより視覚的にということで、ちょっと井原市の地図とそれぞれ小学生の児童数がどういうふうに各地区で減っていくかというのを１枚の絵にしております。ちょっとグラフが全部一律上限を同じ４５０なら４５０にしてやると、もっともっとグラフが低いのが目立つんですが、そうすると、もう見えないぐらいになる小学校もあるんで、ちょっと出部小学校は４５０を上限にしてグラフを作ってる、高屋小学校とかできるだけ３００を基準に作ってるんですけど、そうすると、１００人切る学校はもう点になってくるんで、ちょっと野上小学校なんか１００人を上限にしてもこれぐらいのグラフにしかならないというところで、できるだけこんな状況だということが目で見てわかるようにしております。

次の別紙２です。別紙２は、全国学力・学習状況調査と岡山県の学力・学習状況調査の結果を推移表を作りたいなあと思って作っていったんですが、過去５年間を執行部から報告いただいてるものを、以前に報告いただいたものもちょっと事務局のほうで準備いただいて作ってみました。ただ、２９年度、今年度から小学３年生から中学３年生まで全員の対象に何らかの統一テストをやってるんですけど、２８年度以前というのはもうここへ書いてあるように、全国は小学６年と中学３年はずうっとやってきてるんですけど、それ以外の学年については岡山県が中学１年生はやっていただいてるんですけど、それ以外の学年については今年度からしか始めてないんで、なかなか推移でちょっと今回見れなかったんです。色分けしてるのは、同じ子ですね。例えば、中学３年生の今年受けた子は２８年度は中学２年生、２７年度は中学１年生、その前が小学校６年ということで、推移が見れたらいいなあと。毎年中学３年見ても、対象者が毎年変わるんで、余りこれが増減したからってどうのこうのというて余り議論はできないんで、同じ子をずうっと毎年追っかけていくことが推移が見れるのかなあということで拾おうとしたんですが、なかなか数字が拾えなかったんですが、ちょっとそこら辺は参考に見ていただいて。

委員（佐藤　豊君）　　遅れて申し訳ございません。

委員長（西村慎次郎君）　　そういう見方をしてください。グラフに表そうとしたんですが、グラフも余りめり張りがなかったんで、だんだん右肩上がりで上がっていけば理想だなあと、いろんな取り組みが効果が出てきてるねというふうに見えてくれば理想だなあと思ったんですけど、ちょっと余り目に見える形にはならなかったんで、今の中学１年生なんかは少し右肩上がり、２分の２ページの下なんかはそういうふうには見えますけども、なかなか今後ずうっと経年で同じようなテストを繰り返していくことで、多分他地区というか、他市町村の取り組みもあって、全体が上がっていきょうると、なかなか井原市がほいじゃあそれ

以上に上がるかというのはあるんですけども、全国との平均との比較とか県内での比較というのも見ながらいけばいいかなと思って、参考としてこれを作ってみました。

以上、私のほうで作成した別紙は以上です。

それでは、今の資料も含めまして、また前回執行部からいただいた資料も含めまして、もし皆さんのほうからご意見等ございましたら、ご質問を含めて、資料が膨大なんですが、お願いしたいんですが、ちょっと一遍にいろんな角度から質問されると、話がまとまりがなくなるんで、できれば執行部への質問をしたときの調査事項ということで、１から１１まで話をしてもらってますもしくは整理をしてますということで、１から順番に現状把握という視点でこの辺はもう少し詳しくとか、この辺どうなんかなというところを委員の皆さんの双方で全体で議論できたらなあと思いますんで、よろしくお願いします。

まず、１番の市内幼・小・中学校の園児・児童・生徒数の状況についてということで、執行部からも資料をいただいておりますし、私のほうでも資料を整備しておりますが、これについて皆さんのほうから何かご意見がありましたらお願いいたします。

委員（山下憲雄君）　大変貴重な資料をありがとうございました。大変手間もかかったと思うんですけども、小学校の児童数の将来これから５年、将来に向けて減少傾向がよくわかるんですけども、１３の小学校、ここのいわゆる現状把握からどんな課題が見えるかということを設定しますと、単純に思いますと、小規模校が半数以上になると、そうすると、学校の統廃合等も当然ながら市として検討していく大きな課題になるというのはもう避けられないというふうに思いますので、その観点から、この分析表からそういう課題を幾つか我々抽出すべきじゃないかと思います。

以上です。

委員（三輪順治君）　学区ごとの推移については、幼年期、年少期における大体委員長、副委員長中心によくまとめていただきまして、まず御礼申し上げます。

私がちょっと気になるのは、地域の教育力ないしは地域とのかかわりで、井原市全体が地方創生ビジョンの中にあるように相当減ってきます。その減り方も我々はトータルでしかしっかり説明を聞いておりませんが、多分地区別に見ると、いろんな差があると思います。かなり厳しい地区も出てこようかと思います。これは、教育委員会そのものには関係ない、教育議論そのものには関係ないんですが、教育を取り巻く環境ということで、地域の教育力というものも見過ごせないということがありますので、参考にこの学校の子供の数の推計はわかりますが、地域力としての地域人口ができないとは思いますけども、可能な限りの推計で、今の中学校区ぐらいのレベルでいいんですけれど、これから何十年後に何万人とおっしゃってますが、５年後、近い時期にあわせて議論をする上で、どうしても必要であると私は思っておりますから、これは将来における産業や教育や大学、いろんなもんにかかわってま

すし、幾らか欲しいなという気がしてますが、出なんだらしょうがないと思いますが。

委員長（西村慎次郎君）　　具体的にいきますと、地域の……。

委員（三輪順治君）　　中学校別の５年後の人口推計、これとあわせたような形で、もうざっくりの推計、トータルが合うと。難しいと思いますが、しかし地域で、それはもう多分高齢化が進んでくるから、地域の教育力は何をもって言うかというのは難しい議論にはなりますけれど、やっぱり壮年期やあるいは初老期、超高齢期はいけませんが、初老期はまだ地域とかかわってくるから、昔遊びにしても、放課後児童クラブにしても、支援員の確保にしても、いろんなものがあるけれども、人口が下がれば全体も下がってくりゃ、まあええじゃねえかというようなアバウトな議論もあるけれど、一応数値として委員会としてはある程度推計のもとで前提に組み立てていったほうが恐らく地域の教育力も増えざるを得んと思います。というのが、廃校になったり、今出ましたけど、統廃合になると、施設をどうするんかという議論に必ずいくと思います。委員会がどこまでかかわるかは別としても、そういうことがもう目の前に来とると。今から準備を始めて、ここの地区はこういう形で活性化のための拠点にしようとかという議論を始めないと、１年、２年後にはもうできませんから、数年かけてやっていく、そのための素材としてそういう地区別のパワーも人口という指標に置き換えて出してみる必要があるんじゃないかなというふうに私は思います。

委員長（西村慎次郎君）　　地区別の人口の今までの推移は多分出せるんでしょうけど、今後の推計になると、人口ビジョンにある推計の比率をもう単純に地区へ掛ける、それしかない。

委員（三輪順治君）　　恐らく、今の井原市の推計方式が多分コーホートというて、出生率とか死亡率を掛けて、外的な要因を掛けてどんと計算させとるからわからんと思う。トータルでしかわからんと思います。多分、コーホートというんですけどね。それではなくて、今おっしゃったように、現状がこのまま推移したら、多分この、例えば今人口が１００人おると。これが７０になると。そしたら、どこが減るんなというたときに、個々には計算できないので、現状の比率で当てはめてみるしかないけれども、その数字は実は目の前に来たときに非常にショッキングなものになる可能性もあるんで、それはやっぱり委員会としても押さえていきたいと。そこに、年齢３個分でもええわ、６５歳、７０歳以上を含めて中年期、それからあと高齢期を重ねてみると、相当厳しい状態になると思われるんで、もう早いうちから地区の自らの課題として取り組まんと、教育委員会や井原市に何ぼ言うても、自分たちが立ち上がらにゃいけんということを我々としても一緒に考えていく世代として提供していきたいと私は思っております。難しいと思います。

委員長（西村慎次郎君）　　調査できる範囲内で、非常に……。

委員（三輪順治君）　　これわかったら神様じゃ。

委員長（西村慎次郎君）　　年齢層が多分各地区で違うから、減少率も多分各地区で違うと思います。

委員（三輪順治君）　　じゃけえ、現状把握という意味において、将来ここへ小学校が出とんなら、あわせて地域の人口もあれば議論の足しになるということでございます。

委員長（西村慎次郎君）　　大事なことはわかりました。

副委員長（宮地俊則君）　　三輪委員、もう課題を見つけて総論的な課題をやるという、今委員長のほうは、この執行部の質疑、１から１１までですか、順次の分析を言っていただいてますんで、私はちょっとそこらあたりからさせていただきたいと思いますけども、大変わかりやすい、委員長さん、作っていただいて本当ご苦労だったと思います。

１点、Ａ３の一番最初の１分の１ページの幼稚園の児童数、児童現状ありますね。幼稚園児という、もちろん質問が市内幼・小・中の生徒数、児童数ということでお聞きしとるんで、こういう形なんでしょうけど、むしろ保育園へ行かれてる子のほうが多いように思います。そういう意味から言いますと、先ほど小学校、中学校についてはほぼ私立へ行かれる方というのはごくごくマイナーだとは思いますし、ですからそれと国勢調査をもとに、特に３枚目の、４枚目ですか、推計をされてます。そういうとき、国勢調査のあれでということだったもんですから、やっぱり入り口の幼稚園といいますか、この年齢の推計が基本になるんじゃないかなというふうに思います。ということで、今一度、市内幼稚園でなくて、対象者数の現状はもちろんわかると思いますけど、今後の推計、これがもうベースになってきて小・中と上がって行くんじゃないかと思いますので、できましたら、それがあれば今後言いたくはないんですけど、小学校、中学校の統廃合とかいろんな課題が出てくるかと思いますんで、全体の今後の出生数か、そういうものも含めた幼稚園の段階での対象者数の推計があればより正確な今後の市内の子供の動き、ニーズ把握がわかるんじゃないかと思います。

委員長（西村慎次郎君）　　既にもう生まれてこられてて、地区別の人数というのは、住所ですけど、住所を基準に把握はできるんですけど、３歳児が５年後の３歳児ってまだ生まれてこられてないんで、横ばいと見るのか、同じ減少率で各地区減少していくのかという、そこを見れば推計として、ここの委員会として出せないことはないんでしょうけど、それが当たるかどうかというのはもう何とも言えないとこですけど、どうしますか。

副委員長（宮地俊則君）　　いやいや、じゃあ現状でも結構なんですけど、これは幼稚園児だけですよね。保育園児のほうが当然多いと思うんですよ。ですから、実際の対象者数の推移があれば、推計は難しいにしても、そちらのほうがよりちょっと正確なデータになるんじゃないかなと思われます。恐らく、そこらあたりから小学校、中学校も推計してるんじゃないかと思いますんでね。だから、やっぱり入り口になる、スタートになるその年代からの把握がやっぱり必要じゃないかなと。どういう課題があるかというのを分析する上でも、必要

じゃないかと思います。

委員長（西村慎次郎君）　今の地区別の人口、地区別、年齢別人口で出させてもらうんであれば、それは可能だと思っています。多分、保育園児だけ拾う、保育園児も地区別は各園ごとの地区別の人数はわからないとは思うんで、保育園にも通われてない、幼稚園にも通ってないお子さんもいらっしゃる可能性もありますんで、昨年度の３月末は年齢別の人口はありますんで、それで参考までに出して。

副委員長（宮地俊則君）　あればそれでもいい。それを拾えば出てくるわけですね、対象者数ということで。幼稚園、保育園或いは自宅も含めて。

委員長（西村慎次郎君）　前回の資料で、私が作ってる資料で、これ配付してますよね、多分。ちょっと頭の年度が、年が間違えてますけど、この間の資料の後ろへもうプラスアルファ、それです。それの一番上が住民基本台帳の２９年３月末時点での年齢別人口なんです。住所の地区別にしてますんで、稲倉は中学校で計算するときは分けてますけど、小学校単位を見ると、これでゼロ歳児がこういう人数であると、１歳児はこういう人数であるという内訳で見ていただくのが一番今の質問には近いのかなあと。なんで、野上町なんかは４歳児までは今いらっしゃらないという状況です。

副委員長（宮地俊則君）　野上はゼロ。

委員長（西村慎次郎君）　このあたりも参考に、あわせてみると、ここもベースになって小学校の児童数は推計を出してますんで、幼稚園へ通われる人数の多い地区と、高屋みたいに全然保育園児のほうが多い地区というのは見えるかと思います。

委員（山下憲雄君）　宮地副委員長が言いたくはないんだけどもというふうなことで、統廃合のお話をされましたが、僕は言わないといけないなと思ってるんですけども、この数字によりますと、今現在が小学校の井原市内の全体が１，８２５名おって、５年後に１，５６７名になるということなんですが、およそ８割、８６％ぐらいに減少になるわけです。そうしますと、今でも１３校からしますと、平均１校にあたり、これは小さいところもあっての話で１４０人台で、これが１２０人台まで全校生徒が落ちるわけです、平均で、単純にですよ。そうしますと、６年生で割り返しますと、１学年２３人みたいなことになっていって、それがさらに２０人台を切るような状況になるのはもう目に見えてるわけです。そうしましたときに、今文部科学省が言ってるような１クラス３５人、これはこの間の資料で何か話があったと思うんです。３５人とか、それが標準であるとかというような指標が示されておると思うんです。それからすると、ほとんどの小学校がこの値を切ってしまう。そうしますと、子供の例えば小規模の中でのクラス替えができないとか、クラブ活動ができないとか、或いはその他の同じ切磋琢磨しないで少人数が小学校６年間同じ人と付き合うとかというような弊害、子供にとっての弊害というのはたくさんこの間もあったと思うんです。そういっ

たようなことを大人目線よりも、子供を育てる、教育するという観点からすると、その時代になったときに何校残して、或いはその間の移動とかというのはスクールバスというんですか、そんなんで移動して、やっぱり子供のためにこういう学校に市として作っていこうよというようなビジョンは今から語らないと、５年後には僕はできないと思います。５年後に語ったら、また先の１０年になったときにはもう黙ってても現状が起きてから対応する、もう現実対応みたいな話になってくるんで、そこら辺を我々はこの数値からこうあるべきじゃないかということをむしろ議会として、この委員会として提案していくようなことを一つの課題にしたほうが、言いにくいことやけども、言っていかないといけない、地域と摩擦もありますけども、越えていかないといけない問題じゃないかなあと思います。

以上です。

委員長（西村慎次郎君）　おっしゃることは理解できますし、統廃合については、ただ人数だけの問題ではない。やっぱり、地域からそういう児童の声が聞こえなくなるとかという地域の課題も出てきますので、慎重にはしていただく必要はあるとは思うんですけども、議論はしていきながら、中ではいろいろ議論してるんですけど、表に出すときには慎重にいかないといけないとは思ってます。

委員（山下憲雄君）　大人の声に遠慮してたら、子供のためにならんというのが私の考え方ですので、その辺はいろいろありますから、よく慎重にしないといけないと。

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君）　続いて、２です。

市内小・中学校の学力・生活状況ということで、私のほうで資料をつくった部分と執行部からも資料をいただいております。学力状況調査とか、あと生活向上プロジェクトのアンケート調査結果の内容ですとか、ちょっと生活状況調査のアンケート結果のグラフが非常に白黒なんで、どれがどれを表しとんかようわからんところはあったんですけど、左から順番に多分グラフ。１１ページとかが、これが生活状況のほうです。学力・学習状況調査は先ほどのグラフとか数字を表を見ていただければいいかと思います。

生活状況からいきますと、年々改善はされてきてる。例えば、朝食摂取率とかといっても、幼児、児童、生徒全てにおいて、年々毎日食べてる子供たちは増えてるなあというふうに、運動時間については横ばい、ちょっと増えてるかなあというぐらいではありますが、睡眠時間についても、しっかり寝れてる子が増えてきてるのかなあと。逆に、中学生になってくると、中学生もそうか、７時間以上寝てる子が増えてきてるという状況ではあります。そういった情報を資料提供していただいております。とりあえず今の現状ということでよろし

いですかね。

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君）　　最後、全体を通じてのご意見も伺いたいと思いますので、またあればそこでお願いいたします。

３の市内小・中学校における学力向上、生活改善に向けた取り組みということです。

これにつきましては、執行部からの説明、また資料としては６という各中学校区ごとに作られてる学習スタンダードとかというとこら辺も説明がありました。資料７は、研究事業の内容の説明もこの中でありました。執行部からの説明としては、いろんな角度からいろんな取り組みをやってきてるんだということで、全てがこの学力向上、生活改善につながってくるということで、重点施策としてはイノベーション３５ということで、先ほど紹介ありましたけど、３５の推進事業、いばらっ子伸びる学力支援事業とか、落ち着いた学級づくり推進事業などを学力向上や生活改善に向けた取り組みということでやってるんだということで説明がありました。

委員（妹尾文彦君）　　この質問をしたときの答弁のほうに、ＩＣＴの活用に関しては活用の何かこうスタンダードじゃないんですけど、資料が用意できるかと思いますって言われたんで、それがあれば欲しいなというふうに思いました。

委員長（西村慎次郎君）　　裏面の６ページの質問の２つ目にＩＣＴの活用に関する質問をしていただいてますが、それの答弁として、ＩＣＴの活用は活用で他のものが出ておりますので、またそれは資料提供できるかと思いますということをいただいてますので、ＩＣＴの活用について具体的にどういう活用をされてるかというのを執行部へ確認してみたいと思います。

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君）　　４つ目の生活状況、ＩＣＴ活用、ここもＩＣＴ活用出てますけども、また学習規律の徹底と学力との関連性ということで、それぞれのことに対して、学力とそれぞれの生活状況とかＩＣＴの活用とか学習規律の徹底ていうのと学力の関連性について質問を投げておりました。いずれも関連性はあるという答弁だったかと思っております。

先日、ちょっと伺ったことなんですけど、中学校区で、これ連携の話もちょっと入ってしまうんですけど、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高屋中学校区なんですけど、そこで連絡協議会みたいなことをされたときに、中学校長が言われたのが、それも又聞きで聞いてる

んですけど、幼稚園とか保育園で片付けができない子は中学校に上がっても宿題とか提出物が正しく出せないと、これは紐づいてんだって中学校長先生が言われて、確かにその辺、幼稚園とか保育園の先生とかがそれを聞かれて、やっぱり紐づいてる。それは、我が子を見てそんな感じで印象を受けちゃった人から聞いたんですけど、割とそういう幼・保でそういうことが、おもちゃとか片付けが自分でできない子、それを親がしてしまうような家庭の場合は、その子っていうのは中学校上がると提出物をいつまでに出しなさいと言っても出せないというか、出さないという、その辺も幼少期からのそういう生活の仕方が中学校上がってもそれがずっとつながってるんだよっていう話をされたことを聞いたんですけど、やはりそういう生活状況とかというのは学力にもそれがまた影響してくるというのは中学校の校長先生とかは感じられているという話があったようです。ご参考までで、はい。

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君）　　それでは、５つ目です。

小・中学校における「いじめ」「不登校」の状況ということで、過去５年間の推移について執行部から説明をいただいております。これについては、質疑も前回いろいろ出ておりますけども、その辺を参考にしながら皆さんのご意見をお伺いしたいと思います。

印象的には、この人数を皆さんはどう感じられる、多いなと個人的には思ったんですけど、不登校とかですね。いじめとかというのは、表面化してないところもあるんで、もう少し実態はあるのかなというのもありますし、学校が把握できてる範囲内と地域のクラブ活動とかというところをしているとそこであったり、もう少し実態はあるのかなあという想像はしちゃうんですけども、県内平均は０．５％ぐらいですけど、井原市は１％ちょっと、出現……。

副委員長（宮地俊則君）　　いじめ、不登校。

委員長（西村慎次郎君）　　不登校。

副委員長（宮地俊則君）　　不登校のほう。

委員長（西村慎次郎君）　　不登校は、質問の最初の、これは説明であったんじゃろうなあ。いきなりこの数字……。

副委員長（宮地俊則君）　　０．４７％、０．９７％。

委員長（西村慎次郎君）　　これは表にあったんか。資料の４－２で１５ページの不登校の率を書いてます。ただ、平成２７年の話ですね。２８年はまた県平均、全国平均に戻ってはいる。

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君）　　それでは、６番目の幼・小・中学校連携に関する本市の取り組みということで、幼小中高連携会議ということを定期的に年何回かやられてるんだと思います。７月にやられてて、小中連携とか中中連携とかということもされておりますし、小中連携教員というのを一部の小学校、中学校で配置をされてたり、中中連携教員ということでも高屋中に１名配置されて、木之子中、井原中と連携してると、兼務してるというような取り組みはされてるという説明でした。

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君）　　それでは、７つ目です。

市内小・中学生の通学手段の状況ということで、これは資料がなかったんですが、ご存じのとおりですけども、小・中学校の通学手段は徒歩もしくは自転車ということであります。スクールバス等を利用している学校というのが芳井地区、美星地区にあります。高屋地区も対象にはなっておりますが、実態としては芳井小学校に２５人、美星幼稚園に１８名、美星小学校が１００人、芳井中学校が８人ということであります。バスの保有台数も芳井が４台、美星が５台と北振バスさんの車両を使ってスクールバスの運行を行ってるということです。

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君）　　それから８番目、井原中学校校舎建設状況ということで、これも口頭での説明になりました。委員会開催時点、去年の１２月８日時点での全体工程は５．２％ということで順調、予定どおり進んでるということで、来年の夏休みには特別教室棟が完成すると、いいえ今年の７月には特別教室棟が完成して、夏休みに引っ越しをするという予定になってるというご説明でした。

委員（佐藤　豊君）　　これを聞かれたときに、現状の中学生が校舎建設等々で音が出たことで学習に対しての障害があるとかということは全く今のところは表に出てないという、聞いてない。静かに授業を受けられる環境で建設のほうも進んでるというふうに理解してよろしいでしょうか。

委員長（西村慎次郎君）　　先日の答弁としては、そういう答弁だったなというふうに私は理解しております。「現在は月に２回定例会議を行って、教育委員会や都市建設課、事業者

と学校で、この中で工程の管理、進捗状況、それからそれぞれの問題事項等々を協議しておりますけども、特にそういった学校面での危ないことがあったとか、大きな騒音で授業にならなかったということはお聞きしておりません」ということでありますので。

副委員長（宮地俊則君）　　これは、このときの執行部でそういう話は具体的になかった、質問はこれ私して、なかったんですけども、当初の建設計画の全協での説明のときに、当然ながら、音が全くせんということはあり得ないことで、そういう質問も出たと思います。業者のほうに言って、登下校時に子供の通学に支障のないように、その当時は工事車両を通さないとか、入れないようにするとか、あるいは防音に関してもできるだけ配慮すると、これはまた工事が進捗していく中で改善をしていきたいという質問に対する答弁だったと思うんで、このときは出てないですし、どの程度の音が出るか、振動が出るかというのはケース・バイ・ケースですという回答であったと思ってるんです、一番最初の建設の説明のときに。

委員（三輪順治君）　　確認なんですが、聞いてるかどうかはちょっと記憶にないんですが、現場事務所に井原市の建築関連の責任者がおっちゃったですかね。教育委員会はおると思うんだけど、それは聞いてないか。

委員長（西村慎次郎君）　　聞いてないです。

委員（三輪順治君）　　日常的に、まあ本格工事はまだ始まっておりませんが、本体の校舎をつつくときは騒音のみならず、振動も相当出ると思います。それに対する天井からの塵、埃も落ちてくると思います。授業に与える影響は結構ありそうなんで、恐らく日々の、これ月２回とありますけど、かなり毎日協議しながら慎重な工事をやらざるを得んと思います。ですから、進捗自体にも影響がある場合もありますんで、これは独り言じゃ思うて聞いてもらやあええんじゃけど。

副委員長（宮地俊則君）　　そういうわけには……。

委員（三輪順治君）　　例えば、今井原高等学校を巡って、県立高校、今井原高校と精研、２つの校地がありますが、校地を一つにしようという話もあります。ところが、校舎は残ってますね。最悪の場合、その校舎の利用を含めて県との協議をしていくと。例えば、それは物理的に今の西江原からこっちに移転して仮庁舎というイメージですね。仮校舎というイメージで授業をして、こっちを本格的にがんとやってしまうということも選択肢としてはあり得る。でも、これはもう工期に入ってるんで、四、五年間、ないですけども、現実に即して考えんといけないんで、僕は大きな鉄筋の本体の校舎を壊すということになると、相当な難しさが出てくると思いますんで、これは現場の確認もある時期また委員長にお願いしていかにゃいけんだろうと思ってますが、子供たちの声とか先生のやりにくさとか、或いはいろんな面で周辺の方々のお考えであるとか聞いていかんと、もう動き出したものは止められませんけえど、少し変化球しながら、工夫をしながらやっていく必要があるだろうとは思ってま

す。

委員長（西村慎次郎君）　　別調査とかというとこまではないにしても、現場の声を聞くとか、現地を確認しに行くとかということはどっかタイミングで行ってもいいのかなあというふうには思ってます。

委員（三輪順治君）　　弾力的に。

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君）　　それでは、もう一つ行きましょうか。９、市内幼・小・中学校の教職員の勤務状況についてです。

委員（山下憲雄君）　　これ、ちょっと僕も学校の環境がよくわからないんですが、この井原市内の小・中、幼稚園も含めて通われる先生方は井原市外から来られる人が多いのか、井原市内に居住している人が多いのか、そこら辺がどうかということもちょっと把握すべきじゃないかなと思うんです。男女先生の割合みたいなとことあわせてですね。

委員長（西村慎次郎君）　　市内から通われてる先生、市外は地区別はいいですか。

委員（山下憲雄君）　　地区別。

委員長（西村慎次郎君）　　福山とか笠岡とか大きな市町単位で、あと男女、年齢構成まではいいですか。そこまでは教えてもらえんかもしれませんけど、どこまでにしますか。

副委員長（宮地俊則君）　　ここは岡山教育事務所管内ですわね。そういうことで、異動もあります。もちろん市内が一番多いと想定されますけども、市外であっても、これをもってどのように課題を、通勤時間のことでしょうか。

委員（山下憲雄君）　　近ければ結果残業というか、学校に残ったりすることっていうのは余裕がありますから、まあ今日５時に帰らないといけないということはない。遠ければ、もう今日早く帰らないと、その用事を達しないといったら、やっぱり先生が、そういうのが結果的にこの時間統計に出てる可能性があるんじゃないかなという、関連性があるかどうかわかりませんけども、子供たちにとっても、そういう私的要件、遠いからという要件があれば、本来必要とすべき必要残業時間というんですか、勤務時間の標準があるとしたら、それを逆に阻害しているようなことも起きてくるんじゃないかなというようなことが起こり得るかもしれませんが、わかりません。そういうことで、データがあれば、教師の立場からすると、井原市内に自分もおって、全く同一環境の中で教育していかれるほうが、よそから教育に来てるという心得よりもいいんじゃないかなというのが私の私見でございます。

委員長（西村慎次郎君）　　勤務時間と教員の通勤時間がひょっとすると関連があったりしないかというところでの調査をしてみてはどうかと。

委員（山下憲雄君）　　私の知ってる先生がここの高屋から福山の小学校に通ってる女性の教員がおられるんですけども、大変、子供はこっちの学校に行ってる、子供が帰ってくるのに帰らないといけない、すごく教員の生活に影響を及ぼしてるということを聞いてましたので、ちょっと考えました。

委員（三輪順治君）　　今朝の山陽新聞の１面に、教員の方々の平均勤務超過時間が出てました。僕なんかが経営的に考えると、あの時間を時間外で計算すると、１時間仮に２，０００円と計算して相当な額です。別にそれはそういう意味じゃなくて、あんだけ平均であれですから、多い人、少ない人いると思います。何で時間外があんだけあるんか、今井原市もアシスタントとか校務支援とか、いわゆる中学校における運動部活動のあり方についても教育委員会から各学校に出てますね、減らそうとか。それから、夏休みを３日設けようとか、５日設けようとか、それはそういう方向はええと思います。ただ、やはり職業の性格として、お医者さんもそうなんですが、極端に言やあ、お医者さんの場合は２４時間拘束される可能性があって、それは職業倫理であって給料も本来高いです。教員の方々も当然そういうことを踏まえて、給料が一般の職員より多いと思いますが、ただ余りにも人間的な生活を無視するような教育の現場ではあってはいけないと思いますんで、校務支援が入ったことですから、時間外の要因別、細かいとこはええですけえど、一遍ちょっと井原市は平均より少ねえたあ言いながら、どういうことで時間外をしていくのかというのをデータ的にも取れますので、１年間は少なくとも。そりゃ貰ろうても、やっぱり評価してみないといけない。では、どこが悪いんかという、やっぱりこれは是非お願いして、お聞きなり、或いは資料をいただければ役に立てれるものだろうというふうに思ってます。

委員長（西村慎次郎君）　　残業をどういう理由でされてるかというところの確認ということであります。それについても、確認をしてみましょう。

委員（佐藤　豊君）　　この（７）のところ、部活の件と今の残業ということなんですが、部活なんかに本気で取り組まれてる先生方は土曜日、日曜日も出勤という形になると思います。その人の時間が１日出勤、残業というそれを取るのか、どういうふうな捉え方になるかはわかりませんけれど、練習試合について行った、また本試合について行ったというたら１日になりますよね。それなら、残業代に全部平均の、みんなが７７時間とか７８時間とかという残業平均でいってますけども、部活の先生方のことも全部その数字の中に入ってるのか、部活の先生のはもう残業とは別のデータ的に数値で大変厳しい状況にあるというふうな捉え方にしてあるのか、その辺の部活に取り組んどる先生方の時間が平均の中にずぼっと入ってるのか、どういうふうな数値的な計算方法になってるのかといったこともあわせて、今三輪委員が言われたような残業の内容ですよね。どこに一番時間を費やされてるのかという内容のことも理解を我々しといて、そういったところから改善点をもう少し煮詰めていっ

て、こういった方向性は考えられないんでしょうかといったアドバイスもできるんじゃないかと思うんですけど、全くその辺の内容がわからないと、改善点をどこに集約していっていいのか、ちょっとその辺がわからないと思うんで、その辺の情報があればありがたいかなあというふうには思います。

委員長（西村慎次郎君）　部活動とか土日含めて、平日の放課後をやってるのが残業時間の中にカウントされてるのか、それは別に手当として出てカウントされてないのか、ちょっと確認はしてみないとわからない。

副委員長（宮地俊則君）　私もこれ、こういったところが大変重要な、三輪委員も今言われましたけども、昨今この部活の担当教諭の厳しさというのがクローズアップされて特集までテレビなどで組まれてます。といったことで、教職員の皆さんは残業手当はありませんから、教職員加算という形で一律にされてるわけですから、言ってみりゃあ、サービス残業みたいなもんなんでしょうけども、そこら辺の実態というのをやはり井原市内においてどうなのかというのを把握して、ここらあたりはやはり委員会としても提言なり取りまとめて、先ほどから言われてる残業してる、じゃあ一律に早く帰りなさいというても、先生方も早く帰りたいんだけど帰れなくて、しなきゃいけないから残ってるわけでして、じゃあそれをどうすればいいかという課題というのはもう一つ根っこにあるかと思うんですよね。そういう事務作業が非常に大変なんだということだろうと思うんですけども、そこら辺を校務システムとかいろんな面で考えて、取り合わせて考えて、改善策というのを見出していくというのは私は大変今回のテーマでも重要なことだと思います。

委員長（西村慎次郎君）　引き続き、９番の市内幼・小・中学校の教職員の勤務状況に関する皆さんのご意見をお伺いします。

委員（妹尾文彦君）　先ほど皆さんおっしゃられた残業の要因とか、どのような仕事があるとか、部活が残業に入るかとか、実態把握っていうのも大切だと思うんですけれども、私もよく残業をするんですけど、好きでやってるんですよ。生徒のためにプリントを作るとか、もう別にそんなこと業務としてはなってないんですけど、自分がこういう問題を作ったらいいだろうなあとか思って作るんです。そういうのはあるんで、先生の気持ちっていう部分も温度差はあると思うんです。そのあたりをどういうふうにしていくかっていうところもちょっと重要なんではないかなと思いまして、あとそれと加えて、いろんなことがああしたらいいんじゃないか、こうしたらいいんじゃないかっていうことがどんどん来ると、どんどん仕事が増えていくんですよね。だから、こういうことをしたほうがいいんじゃないかっていうときには何かなくすっていうような、そういう取捨選択っていうんですか、そういうことも重要になってくるんじゃないかと思うので、そういうことも踏まえて今後調査していったらどうかと思います。

以上です。

委員（佐藤　豊君）　今、妹尾委員のほうから言われたことがほんまによくわかるんです。昔、聖職の仕組みってあったかな、先生の本を読んだことあるんですけど、教員というのは聖職だという捉え方ですよね。どう子供、未来を育む、未来を創る子供たちをどう育んでいくか、そこに教職員としての魅力を感じる。そのために、自分ができることは最大限やっていこうという根本的な姿勢で教職員になられとる人が大半だと思うんですけども、それが昨今ＰＴＡの役員のときだったですか、僕が中学校のときに、最近はサラリーマン化してると、もうクラブの顧問もしたがらない。授業が終わればすぐに帰りたがる、そういった先生も増えてきてるのも現状なんですという教頭か校長の話を聞いたこともあるんですけども、その辺の残業という捉え方を今妹尾委員が言われたように、本当に子供たちのことを思って準備をしようという形での超過時間なのか、もう嫌々これだけの書類を整えて出さにゃいけんから、もう嫌々やってる残業時間なのか、やっぱり教職員のその辺の捉え方も今後我々もよく理解して、ただ超過勤務、残業が多いというだけの一点だけで捉えていいもんかなあということも昨今新聞を読んだりすると感じたりもするんですけど、またそういった捉え方をアンケートということまではいかないかもわかりませんけど、把握にちょっと力を入れてみるのも一つの方法かなあというふうには思います。

委員長（西村慎次郎君）　先ほど、アンケート調査というご意見もありましたけど、簡単にアンケート調査がまた先生の負荷になってはいけないんで、それは慎重にいかないといけないんですが、現場の実態を把握しようとすると、そうやって現場のご意見を吸い上げるというのも一つの方法かとは思うんで、今後そのあたりもどうなのかというのは考えていってもいいかなと思います。

委員（山下憲雄君）　この問題は大変今難しい問題ですが、いろいろあれこれ調査しようとかした目的とどこへ着地するかという、この解決課題をですね、というところを定めていかないと、取り組んでも大した成果を我々のほうから出せないとかという結論に陥りやすい内容であると思うんです。これは、マスコミがわあわあ取り立てたりするのは、まあ一つの働き方改革の中で教職というのは聖域であって、他の人が突っ込めないと、それをマスコミが取り上げる。いろんな問題もありますので、我々のこの委員会という機関で取り組んで、何の結果が得られるかということを見る必要があるんじゃないかなと思います。

委員長（西村慎次郎君）　確かに、今は広くいろいろな視点で調査はしてると思うんですが、今日絞り込むか、次回絞り込むかもあるんですけど、ある程度はどっかで焦点を絞っていって目的を明確にして、もう少し深い議論を詰めていきたいというふうには思ってますんで、山下委員のご意見、そのとおりに進めたいと思います。

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君）　　それでは、１０番目です。

井原市民の高校進学状況ということで、中学生が高校に進学するときに市内の高校を選択してるのか、市外の高校を選択してるのかということで調査をしております。２５年度からの５年間の状況を説明いただいております。市内よりも市外のほうが少し、５５、５６％前後が市外、市内が４４、４５％という状況であります。

委員（山下憲雄君）　　市外のほうが多いなあ。

委員長（西村慎次郎君）　　多いんです。今年も例の希望調査で、井原高校は今現在では定員割れの状況でありましたし、興譲館は倍率的には当然超えてますけども、専願と併願というか、県立高校との併願もありますんで、これが最終的にどこへ落ち着くかというのはありますが、他の笠岡のほうの私立高校とかと比べると、倍率は低いのは低いという状況です。ただ、来年度から公立ですけど、矢掛高校が１クラス、普通科減りますんで、これが人の流れがどう動くかというのは注視したいところではありますが、今の状況です。

副委員長（宮地俊則君）　　これはもう一言で言ったら、それぞれもうそれぞれの高校が魅力ある学校づくりというのに取り組んでいただくほかないわけでして、県立ですから、市の市議会がどうこうという、把握をする必要はあろうかと思うんですけども、もちろん中学３年生の子供たちにとっても選択の自由があるわけで、これをどうしなさい、こうしなさいということもなかなか難しいんだろうなと。だから、これは先ほど山下委員言われたように、突き詰めてどういった成果がこの委員会として導き出せるかといった場合に、非常に難しいテーマだろうなと思います。まあ、これはこれ以上言いません。

委員長（西村慎次郎君）　　これも調査しようがないんですけども、どうしてその学校を選んだのっていうところで、もし交通面とか通学しやすい場所とか、そういう交通面が出てきたときに、ひょっとすると学生をターゲットにした公共交通網を整備するとかという話をひょっとすると発展はする可能性はあるんですが、それ以上に副委員長言われたように、魅力ある学校だったら、少々の交通手段が不便でも行こうかいうとこもあるでしょうから、どうなのかなというのはあるんで、ちょっとそういう視点もあったんで、このテーマを少し上げてはいたんですが。

委員（佐藤　豊君）　　今、宮地副委員長が言われたように、子供の選択肢ですから、もううちの近所から岡山南へ行きょうる人もいるんですよね。ですから、ええと僕は聞いたときには思うたんですけど、やっぱり自分が行きたいという強い意志を持たれとったら、最終的には家族も大変じゃけど応援してという形になっとるような状況なんで、子供の選択によるしかないのかなあというように思うと同時に、先ほど宮地委員が言われたように、やっぱり

市内の高校が魅力ある格好のモチベーションというか、魅力を最大限、また再度発信して欲しいと、また発揮して欲しいなあということしかないですね。

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君）　　それでは、最後になります。

１１番目、大学等誘致に向けた本市の今までの取り組みということで、これについては企画課のほうからの説明がありました。

委員（三輪順治君）　　私が質問した中の漢字が間違うとんですが、質問の２行目、減債基金じゃなくて、現在基金があると思います、現在、これ、減債に聞こえたか知らんけど。

副委員長（宮地俊則君）　　ああ、現在か。

委員長（西村慎次郎君）　　現在、基金があると思いますが。

委員（山下憲雄君）　　これも一つのアイデアですけども、いわゆるストップしてる状況なわけですから、もう今後もこの人口規模からしても、そういう大学や専門学校等がここに設置されるとはほぼ不可能な予測だと思うんです。

先ほど、今度現存する高等学校の入学者数減というようなことを言うていったときに、ゼロになってしまうということは遠き将来困るわけですね。大変困るわけですので、ただ我々が受動的に動けると、我々というか、井原市として動けるのは市立高校の今後の行方だと思うんです。これを専門学校化して、看護学校を造るとか、何やら技術学校を造るとかというて、若い人を集める手法というのは考えようによっては可能じゃないかなと思いますので、こういう現存する普通の県立高校等々が減少していく、私学が難儀している普通の高校から専門的高校、高校終わった人がそこへ集まる専修学校というんですか、そういうのは一考することをしてもいいんじゃないかと思います。

以上です。

委員（三輪順治君）　　そういうサイドから、大学にこだわることはないんですが、お金はともかくとして、ある程度時代を先取りしたような研究機能を持つ拠点、全く無視するのでなくて、今井原市の場合は平成１１年だったか、止まってますんで、今までの経過はもう古いから昨年と参考にならんとは思うんですが、恐らく相当努力もされとると思います。一応、先人の努力をもうちょっとお聞きし、研究機関、研究所、国の機関でもええし、どこでもええんですけど、やっぱり井原がそういういろんな面で役に立つような、地域が元気になるようなものに向けての教育的な研究機関的なものについては言及をしておくべきだろうと思いますんで、経過はもう少し詳しく聞いて、何でここでストップしたんか、諦めたといやあ一言なんだけど、でも座して何もせずに沈没よりも、幾らか関係機関、国、県に働きかけ

てみる必要が私はあると思います。今はそれしか言えませんが、よろしくお願いします。

委員（佐藤　豊君）　今、興譲館高校が中国から学生を受け入れるという形で、今までは何か１年研修みたいな、１年学校みたいな１年で終わるということで、これから２年受け入れるというふうな状況で、理事長からもいろいろ話を聞いたこともあるんですけえど、そういった形で国際交流の中でタイとかいろんな東南アジアの国々から学生を集めたいといったような流れを創ろうとされているようです。各理事からも、中国にパイプがある人が理事になられて中国に行って、そういった関係の方とお話ししながら、中国の子供さんを日本へ留学という形で取り組みをされてるような状況にあるようです。そういったことを考えると、やっぱり中国語をお互いに習えるといったような環境整備ということも今後中国との交流というのも非常に大切になってくると思いますし、東南アジアの各国との交流も大切になってくると思えば、長期的なビジョンで考えると、外国語、多言語を勉強できるような環境づくりというのも一つの手かなあというふうには思います。そういった意味の専門的な学校の誘致というか、環境整備に向ける取り組みもあながち無駄にならないんじゃないかというふうには考えます。

委員長（西村慎次郎君）　それは、興譲館高校がというよりかは、市としてそういう環境を整備する。

委員（佐藤　豊君）　大学誘致ということで、僕らが２０代か３０代前半ぐらいには国道４８６号線のところへ看板立てて、大学誘致というのがあったのも確かなんですが、それがなかなか少子化という状況とか、景気、経済の変動によって大学誘致というのがずうっとしぼんでしまったんですけど、やっぱり今後を考えると、若者が井原市に集まる、また来て貰おうといったことになると、やっぱりそういった環境というか、次の将来を担う国際人を育てるためにはそういったことにもチャレンジするといったこともあってもいいんじゃないかなあというふうには思います。

委員（妹尾文彦君）　先ほど、山下委員さんからもあった専門学校とか、宮地副委員長さんの言われた研究機関とか、今佐藤委員さん言われた外国語を学ぶ環境とかあるんですけど、そういうのも高校をそういう専門学校化するような形でするとすれば、大学との連携っていうのも一緒に考えていくと、その後の進路とかも考えやすくなるのでいいんじゃないかと思うんですが、そのあたりもあわせて研究してみたらどうかと思います。

以上です。

委員（三輪順治君）　総じて、今日は現状把握ということで議論が進みました。実は、先週の金曜日に私ちょっと会議がなくなったので、きょうはちょっと中身を持ってきておりませんけども、総合教育会議のほうで、これからの教育のあり方、名前はどうかわかりませんが、恐らく５年、１０年先を見越した井原市の教育のあり方についての答申が出るやに聞い

てます。この委員会における議論も、そうしたものも参考に是非進めていかないといけんし、まさに大学とか含めて、この地域の教育をどういうふうに持って行くかによって、関係者の方々の本当に大変な努力による成果物が出てきますから、それを踏まえて行きたいと思いますので、委員長におかれまして、当局における答申あるいは最終的な形を手に入れていただいて、当委員会に出していただければというふうに思います。

委員長（西村慎次郎君）　　総合教育会議の内容については、把握していきたいというふうに思います。

その他ありますでしょうか。全体を通してでもよろしいと思います。

委員（山下憲雄君）　　今日、稲倉小学校の問題が出てきまして、私地元民といたしまして、今学区割りというのが、上稲木と匠住宅の人は子供は小学生は高屋へ、その他は岩倉、下稲木組は木之子中学校へというふうに長年の歴史でそういうふうになっておるそうです。で、圧倒的に上稲木組というのは少ないわけですけども、ここを見ますと、少ないときは来年、今年は１８名おりますが、高屋へ行く人はもう少人数なんですね、現実。その後ももうほとんどいなくなる可能性が高い。１人、２人とかという状況です。そうなったときに、１人で転校生みたいになってしまうんです、大勢の中に入っていくわけだから。その辺が何の理由かわかりませんが、距離間の中学生の通学距離としても大して変わらないと思うんです、こっちへ行くんも、上稲木から向こうへ行くんも。そういうな状況が、これは市が決めてるんですかね、学区割りというのは、その辺を一遍見直した方が子供のためじゃないかなと私は思いますが、そして父兄の間には６年間の子供同士の付き合いありますが、中学になると分かれます。そうすると、親の付き合いは６年間、他のところはプラス３年間あるわけですけども、その辺で親同士の密接さ、コミュニティーが非常に薄いという環境があるというふうにも聞いております。それから、子供が中学同窓会をするときに、地元で一緒に小学校だった人が同窓会をするときはまた別であったり、小学校の同窓会にしても中学校が別だったから少し密接度が薄いとか、日頃の連絡の取りようが薄いとかといったような状況が今までもあったんだということを聞いておりますので、その辺がこんだけ少人数になった場合、かつての慣わしでずっと行ってるのがいいかどうかをちょっとご検討いただきたいというふうに思ってます。今日もいろいろ出ましたので、ちょっと。

委員長（西村慎次郎君）　　学区の区割りの設定の経緯ぐらいは確認できるのかなあとは思うんですけども。

委員（山下憲雄君）　　変更とか。

委員長（西村慎次郎君）　　変更も非常に、先日提案箱にも下出部は高屋中のほうが近いんじゃないかというような提案もありましたけども、逆ですね、今逆のパターンではあるんですけど、教育委員会からの回答ではその出部地区はこっちというと、コミュニティーの問題

でっていう回答があったんで、今、山下委員が言われてる稲倉地区はそれが同じくそういうふうになっちゃってる現実はあるのかとは思います。ちょっとそこの経緯は私も把握してないんで、今の学区の区割りというのを、そのあたりは再度確認はしてもいいかとは思いますが、非常に難しい問題ではあるとは思ってますけど。

委員（山下憲雄君）　何で私がそういうことを言うかと言いますと、この度片山さんという人が駅伝３区を走って活躍したそうです。それが稲木の出身なんですけども、高屋中学ということで同級生がおるんだけども、この頃付き合ってないからなあというようなことがあったりして、わあっとこういう盛り上がりに欠けたというんですか、そういうなことがあったようです。応援せんのかというようなことが。知らんのよ、この頃会うてないからみたいな話で、そういうことというのは小さな問題ですが、子供同士でどうなのかちょっとわかりません。

委員（佐藤　豊君）　ちょっと全体的に。

委員長（西村慎次郎君）　全体を通して。

委員（佐藤　豊君）　野上小学校が生徒数が少ないということで、市内全域から入学できるといったような状況で今進んでおりますが、今後は野上小学校だけの問題じゃなくなることもこの５年、１０年先になると出てくるというように考えるんです。そういったときに、今回の野上小学校のことがもうそういったことでそういう状況になった学校には全部これから広げていくのか、野上小学校は特別今回だけの対応なのか、やっぱりその辺も明確にしていかなければならないのと、やっぱり全市から受け入れますよというたときには、全部保護者がそこに送り迎えするのか、今通学バスありますけれども、ほいじゃあそういった子供はもう個人、家族で対応してくださいよ、他のところはもうバスはありますけども、こういった状況の受け入れ態勢なんで、個々で対応してくださいよという形でこれからもずっと進めていくのか、その辺のこともちょっと明確に方向性を聞かせていただいとけばありがたいがなあというのは思います。

委員長（西村慎次郎君）　今回、募集をして締め切られているんで、状況がどうだった、募集状況、応募状況はどうだったのかというのは確認してみたいなというふうには思っております。

今後どういう方向でというのは、なかなか回答はいただけないかもしれませんけど、確認はしてもいいと思うんですが、これを広げ出すと、学校選択制が導入されてしまったら、逆に誰も来ない学校ができてしまうんで、個人的には余りそれが全学区制の学校が増えていくことはないんだろうなとは思いますけど、そのあたりも確認をできたらとは思います。

委員（三輪順治君）　ちょっとこれ蛇足ですが、教育と経済の問題です。今日、貧困問題、それから引きこもり、国も上げて、特に引きこもりでは今まで３９歳までしか調査して

ないところを５９歳までやられるということで、経済の問題と教育の関係は絶対にそういうことがあっちゃいけんということで、教育の無償化について今議論が始まってます。教育のあり方も大きく変わっていくだろうと方向的には思いますんで、そこらあたりもできるだけ資料が入れば、これはどこのどういう議論でどがん形になるかわかりませんが、やはり個人的には経済の問題と教育の問題というのは多分不可分な関係にあるかもわかりませんので、一つ情報収集をお互いの委員それぞれやりながら、委員長を補佐して行かんといかんというふうに思ってますので、よろしくお願いします。

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君）　　それでは、本日の現状把握につきましてはこれまでということでさせていただきます。

今日、皆さんにお出しいただいたいろいろ追加の調査事項につきましては、執行部のほうへまた追加調査事項ということで依頼をしたいなというふうに思っておりますが、皆さんからいただいた情報をまず整理を私のほうでさせていただいて、次回定例会の開会日に再確認いただいて、よろしければそれで執行部へ投げさせていただいて、定例会で行う総務文教委員会の中で執行部から回答をいただくというような手順で進めさせていただきたいと思います。

〈異議なし〉

委員長（西村慎次郎君）　　それでは、資料のほうの作成を私のほうでさせていただいて、また皆さんのほうに確認いただくという流れで、定例会で執行部から回答をいただくという流れで進めさせていただきます。よろしくお願いします。

今後ですけども、今日出された追加の質問事項については再度確認するということですけども、先ほど協議の途中ではありましたけども、テーマは絞り込んでいきたいなあというふうに思っております。そのあたりも、皆さんのほうでまた資料等眺めながら、どういったテーマをするかということで、大きく３つぐらいまでには絞り込みたいなあというふうに思います。その中で、課題のほうを整理して、再度委員間討議を進めながら、委員会として何らかの提言もしくは報告ができる形に持っていきたいなあというふうに思いますので、よろしくお願いいたします。

〈異議なし〉

委員長（西村慎次郎君）　　それでは、以上で所管事務調査については終わります。

〈その他〉

副委員長（宮地俊則君）　　その他じゃないんですけど、今の今後のスケジュールなんですけども、先ほどの現状把握についてもろもろの執行部でお聞きするような現状把握の資料、それは結構だと思います。で、この定例会中の委員会で絞り込みはいつ頃を委員長ちょっと、というのは、もうこの委員会もこのメンバーでは１年少々でありまして、その間において、先ほど委員長言われましたように、何らかの提言なり取りまとめをということを当然ながら目標にしていくわけなんですけども、そうすると、かなり大鉈を振るって絞っていかないと、２つか３つて言われた、それは私もそのとおりだと思います。この定例会のときにそれを絞り込むんですか。それとも、それはまた後日の予定でしょうか。

委員長（西村慎次郎君）　　スケジュール的に行くと、次の定例会である程度は絞り込みたい。

副委員長（宮地俊則君）　　次の定例会というのは。

委員長（西村慎次郎君）　　次の２月定例会の中で、執行部からの回答をいただいた後、委員会と議員間討議をして、テーマを大きく二、三点に絞り込めたらなあと思ってます。

その先のスケジュールとしては、ある程度課題を整理して、何らかの改善点を見つけ出して、できれば市民の声を聴く会でそのあたりまでこうやってるんだという状況報告をしながら、また市民の方から意見をもらって最終整理をそれ以降というようなスケジュールで思ってるんで、次回次回と遅れると、なかなか市民の声を聴く会で何らかの報告ができるとこまでいこうとすると、少し早めて今度の定例会で絞り込みは少なくともしたいというふうに思ってます。

副委員長（宮地俊則君）　　わかりました。

〈なし〉

委員長（西村慎次郎君）　　それでは、その他についても終わります。

閉会に当たり、議長、何かございましたら、お願いします。

議長（西田久志君）　　ご苦労さまでした。

委員長（西村慎次郎君）　　以上で総務文教委員会を閉会いたします。ありがとうございました。